



カレブ通信

2018年7月15日
第49号

内容

1 「佐野カレブの会」 立ち上げの報告

島田宏幸

1 報告

「佐野カレブの会」

立ち上げ報告：島田宏幸

2 カレブ ストーリー1

65歳からの人生：

バイロン・ベナー

3 カレブ ストーリー2

神様に導かれて：

小沼健司

「カレブ ストーリーとは」

「今や私は、きょうでもう85歳になります。・・・モーセが私を遣わした日のように、今も壮健です」

(ヨシュア記 14 章)と、信仰によって主の御心を成し遂げたいと願うカレブの熱い思いが「カレブの会」のスピリットです。

「カレブ通信」には、現代のカレブとして歩む人々のさまざまな日常の物語りが綴られています。



これまで佐野にはナビゲーターとの繋がりがある二組の夫婦がおり、宇都宮で集会がある時にはそれぞれ参加したり、奥さん同士は時々会っていました。そのような中で男性の2名が今年、定年退職を迎えることになり、小川吾朗さんからの提案もあり、佐野カレブを立ち上げることになりました。そこでどのような形、内容にしようかと4人で検討した結果、お互いに関心のある自然との触れ合いであるハイキングを通しての交わりから始めようということになりました。

そして1回目のハイキングを6月に実施しました。初めなので、日光の戦場ヶ原という無理のない楽なコースを選びました。【赤沼茶屋→戦場ヶ原→小田代ヶ原→(低公害バス)→中禅寺湖千手が浜→(低公害バス)→赤沼茶屋】当日は薄曇りで、時々晴れ間が差すさわやかな天気でした。戦場ヶ原では、ズミの木が可憐な白い花をいっぱいにつけていました。さらに、川沿いの遊歩道では、ウグイスなどかわいい鳥が鳴き声とともに姿を見せてくれました。小田代ヶ原では、「貴婦人」と呼ばれる白樺の木が健在で、嬉しくなりました。千手が浜では、赤、白、ピンクと色とりどりの美しいクリンソウが咲き誇っていて、日光の素晴らしい自然を大いに楽しむことができました。

今後もハイキングを通して、楽しい交わりの時を持っていきたいと思えます。この交わりの輪が少しずつ広がっていくことを期待して。

【佐野カレブの会メンバー紹介】

松島俊夫：30歳で信仰を持ち、イエス様に支えられながら教員生活を全うする。現在は再任用で小学校の初任者研修指導に週3日携わっている。

松島淳子：学生時代にナビゲーターと出会い信仰を持つ。12年間の教員生活の後、専業主婦に。庭いじりやハイキングを楽しんでいる。



松島夫妻 島田夫妻

島田宏幸：学生時代にイエス様を信じ、社会人になってナビゲーターと出会う。2年前に気象予報士資格を取得し、定年後の働きに生かしたい。

島田みどり：社会人になってからすぐにイエス様を信じ、結婚を通してナビゲーターと出会う。施設で介護福祉士として高齢者と関わっている。

以上

2 カレブ ストーリー (1)

65 歳からの人生

バイロン・ベナー



バイロン・ベナー

1953 年生まれ

大学 1 年生の時クリスマス
チャンになる

1978 年日本来訪

2011 年まで自分の英語
学校を運営管理

2018 年に宇都宮大学の
常勤職を退職

現在、二つの大学で非常
勤の講師および結婚式の
執り行いに従事

旧約聖書においても新約聖書においても、年長者の役割は教える、指導する、助力することであり、若者にとっての模範であるべきとあります。人は成熟すると、良き指導者としてより貴重になることは言うまでもありません。年長者はただ人生を経験するだけではなく、その過程を経て、人生の果実が目に見えてくるようになります。年長者のみが本当に知りえるものがあります。



私の退職についての考えは何処から得られたのだろうか？それは聖書からなのかそれとも育んだ文化からなのか？（ロマ 12:2）この 3 月にフルタイムの仕事を辞めることになり、人生の節目ではいつもそうであるように、答えられる以上に多くの疑問が湧いてきます。

- この数年を、人生のかなで最も有意義な宣教の年とすることができたのかどうか？ より犠牲を払い、よりリスクを取り、より与えるべき時となっているか？
- 知恵、経験、知識や統率力の面で私は何を捧げなければならないのか？また誰に捧げるのか？
- 私の生活の中心に、仕事に取って代わるものとして何が来るのだろうか？
- 誰が私の同僚、友人、交友範囲、仲間になるのだろうか？
- 私が伸ばしたい特性とはどんなものだろう、そして私はどのようにして成長し続ける事が出来るのだろうか？

今まで、私は退職に対して夢を抱き、ついに自由な時間を得た時にやりたいとしていた全ての事、例えば旅行、趣味、より家族と一緒に過ごす時間などについて考えてきました。しかしながら、仕事量を減らすにつれて、自分自身を楽しませるという無意味な試みに、自分の多くの時間を費やすべきでないと思うようになっていきます。残りの人生が短くなるにつれて、残りの時間をより意味のあるものとしたく思います。自分自身に「まだ闘いは終わっていない」と言い聞かせています。しかし「速度を緩めて」、しかも「強く終わる」ことが可能かどうか？

特にこの十数年間、神が私にお与えになった英語を教えるという仕事に、私は新たな価値を見出すようになりまし、私自身それに対して感謝しています。私はいつも得意の分野、例えば教えたり、書かせたり、討論を進行させたりなどの分野に私の仕事の多くの時を注いできました。ですから人生後半で進むべき道を変えるより、同じような働きを続けるほうが、神の御国や社会の為により益になると考えるのが妥当だと思っています。さもなければ、人生の今の時を新しい事に挑戦する機会として捉えるべきなのではないでしょうか？

ナビゲーター・ミニストリーとの関わりは、私に「弟子づくり」について強い希望を持たせてくれました。旧約聖書においても新約聖書においても、年長者の役割は教える、指導する、助力することであり、若者にとっての模範であるべきとあります。人は成熟すると、良き指導者としてより貴重になることは言うまでもありません。年長者はただ人生を経験するだけではなく、その過程を経て、人生の果実が目に見えてくるようになります。年長者のみが本当に知りえるものがあります。勿論、自分の子供達や孫たちに対する年長者の役割も果たしますが、私の経験の益を分け与える事が出来る他の人々もいるのではないのでしょうか？

人生の新しい段階について、私は興奮と少しの混乱をしています。より自由な時のみならず、今よりさらに有益な時を得るべきでないかと思っています。

(和訳：八尋隆幸)

3 カレブ ストーリー (2)

神様に導かれて

小沼健司

「主に信頼して善を行え。地に住み、誠実を養え。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」詩篇 37:3、5

何か他の道があるのではないかと不安を覚えて、日々祈り求めていた卒業前の日々。これらの言葉で押し出され、地元県を区域とする農業団体に就職し、実家に戻ったのは、37年ほど前になる。

そもそも、私は農家の長男として生まれ、幼い時から農業を継ぐのだと祖母や伯父叔母から言い含められていた。高校入学まで「成人するころには就農するもの」と思っていた。しかし、高校3年の時、改めて進路について祈り、隣県の大学農学部入学に導かれた。

聖書研究会のサークルに加わることを受験のときから決めていて、入学後、聖書研究会の新入生歓迎の立て看板に誘われて教室に向かった。大学では国際ナビゲーターの働きがなされていて、宣教師夫妻が学生宣教の中心となっていた。親類も知人もいない地での交わりは、今も忘れられない。卒業後も社会人の交わりが宣教師夫妻宅で月一回ぐらいのペースでもたれ、宣教師から学生時代の先輩で教員をしている姉妹との結婚を祈るよう勧められた。多戸惑いもあったが、数年後結婚し、3人の子に恵まれた。

英語が好きだった。小学6年の時ラジオ英語講座を聞きはじめ、中学入学後暗唱大会に参加し上位入賞した。中学3年の時、英語弁論の県大会で“I will be a famer”で入賞し全国大会に出場した。全国大会では決勝に進めなかったが、期間中各県の代表との交流を通じ、大学に進学するという事を想像した。高校3年の時、新約聖書を毎日1章ずつ読み、進路について祈り求めた。共通一次試験導入前の最後の受験。国立2校、私立2校を受験した。国立大学一校のみに合格した。その頃、新約聖書を初めて読み終えた。

父は、大学進学を喜んでくれたが、後継ぎが遠ざかる気がしていたようだった。その後、実家に戻り就職したことや結婚を喜んでくれ、子育てを手伝ってくれた。父は、母が教会に行くようにという誘いを多くの場合拒んでいたものの、時々、教会に行った。晩年、それも亡くなる前の年、父が洗礼を受けた。私は、父の洗礼の準備で証文作成を手伝った。彼は10歳の頃、兄の本にあったキリストが十字架につけられた挿絵が強く印象に残っていて、結婚し、母に誘われ教会に行ったときに福音の話を聞いて理解したという。それまで何も知らなかった。

父が洗礼を受けたのは、父の救いについて、母と祈り始めて37年。父がキリストの絵に触れて約70年が経過していた。父が亡くなってわが町では珍しいキリスト教式での盛大な葬儀で送り出し、4年が過ぎた。

私の職場の定年は60歳、勸奨退職制度を利用して、1年前倒しで退職することにした。母も農業を一人で続けるのが難しくなってきた。退職後に農業をしようと思っていた私は、ある程度体力があるうちに就農することが望ましいと考えていたが、良い決断の機会となった。父のような人々も私の住む農村部にいると感じている。子供たちも自立した今、幼い日に描いた農業経営者になれるかどうかかわからないが、この地に住み、主と共に歩む生活を送りたいと思っている。



小沼健司夫妻

1959年銚田町（現銚田市）農家の長男として生まれる

地元高校を卒業後宇都宮大学農学部に入學、国際ナビゲーターの交わりに出会う。卒業後、茨城県の農業団体に就職。選択定年制を利用し、来年3月で退職予定。

退職後に農業をしようと思っていた私は、ある程度体力があるうちに就農することが望ましいと考えていたが、良い決断の機会となった。父のような人々も私の住む農村部にいると感じている。子供たちも自立した今、幼い日に描いた農業経営者になれるかどうかかわからないが、この地に住み、主と共に歩む生活を送りたいと思っている。

